

日本仏教学会第 2013 年度学術大会 第 83 回大会

## 唐代禅僧の教えとその実践

### —四家とその周辺—

花園大学 小川太龍

#### 発表要旨

今日「禅宗」と言えば一般的に、坐禅弃道を最も重要視した、修行を中心とする宗派であると認識される。これは、唐代禅僧たちの「語録」、彼らの嗣法を伝える「灯史」を概観しても同様に見える。彼らもやはり「修行」を行い、それにより、「見性成仏」を目指しているように見えるのである。しかし、彼らはむしろ修行とは、否定されるべきものであるとも主張する。唐代禅僧たちは、一方では、今日我々の言う修行に身を置き、一方では、その行為を否定する。では、彼らが標榜とした修行、即ち実践とは如何なるものであろうか。本論考ではその点を、彼らの教説から考察したい。

ただし、唐代禅と言っても、達摩に始まる初期禅宗から、「五家」が形成された晩唐まで、かなりの幅がある。それを一束にして考えることは不可能であり、期間を限定し、論じなければならない。そこで本発表では、唐代にあつて「禅宗」というものが確立され、伸張した期間について論ずることとする。具体的に禅宗が確立されたのは、馬祖道一（七〇九～七八八）を祖とする洪州宗からであり、それは「語録」が十分な形で形成されるようになった時期である。また、禅宗を大幅に伸張・躍進させた転機となったのは、会昌の廃仏（八四二～八四五）であることも明白である。

上記の二点に符号するのは、所謂、馬祖道一・百丈懷海（七四九～八一四）・黄檗希運（？～八五〇頃）・臨濟義玄（？～八六六）という四家が活躍した時代である。そこで、本発表では『伝心法要』『宛陵録』を中心に使用して論究したい。これは、会昌の廃仏の前後に為された黄檗の説法を、裴休（七九七～八七〇）が編んだものであり、内容が非常に理知的であり思想を捉え易く、修行・実践についての明確な意図を読み取ることが可能である。

しかし、ただ黄檗一人の思想・実践形態からのみ、唐代禅僧一般に敷衍して論ずることは当然、妥当ではない。そして、黄檗には生没年・俗名が未詳であるということからも理解できるように、史料の不備がある。これらの点を埋めるためにも、四家を中心に周辺から補って論ずることとする。

また簡明に言うと、本論考で扱うのは、唐代禅僧の「修行」についてである。しかし、本論題には敢えて「修行」という語を使わず、「実践」という語を用いた。本発表を通して、ここで「修行」という語を使用することが、妥当ではないということを明らかにしたい。そして、本論考を進めることにより、今日の禅宗における修行・実践の問題点を考える一助としたい。

キーワード：四家、『伝心法要』『宛陵録』、修行